

特集展「中国陶俑の魅力」(2017年12月16日～2018年3月25日)

番号 No.	作品名称 Title	時代 Period	法量cm) Size(cm)	登録番号 Accession Number	備考 Remarks	作品解説 Description of Works	画像 Plates
1	加彩侍女俑(かさいじじょよう) FIGURE OF A FEMALE ATTENDANT Earthenware with painted decoration	北魏時代・6世紀 Northern Wei dynasty, 6th century	h: 15.0 w: 4.8×5.0	04102	海野信義氏寄贈 Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi	墓に副葬される明器のうち人物像については俑(よう)と呼び習わされています。その歴史は春秋戦国時代までさかのぼります。つづく秦の始皇帝陵の「兵馬俑」はよく知られています。軍隊から身の回りの世話をする侍者や奴婢(ぬひ)にいたるまで多種多様な俑が見られ、当時の生活ぶりを知る貴重な資料となっています。この侍女俑は北魏洛陽遷都(493-494)後の6世紀前半のもので、小ぶりで笑みをたたえた愛らしいものです。左手を腰上まで上げ、体をやや右に傾け、右手には何かを持って作業をしているようです。何気ない動作の一瞬を見事にとらえています。	
2	加彩持箕侍女俑(かさいじきじょよう) FIGURE OF A FEMALE ATTENDANT WITH A WINNOWING BASKET Earthenware with painted decoration	北魏時代・6世紀 Northern Wei dynasty, 6th century	h: 15.0 w: 4.8×5.0	04103	海野信義氏寄贈 Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi	No.1と同じ北魏洛陽遷都(493-494)後の俑で、一括品と考えられます。大きな箕(みの)を両手に持って坐る侍女を表したもので、洛陽地区の北魏墓でしばしば見られます。髪を双髻(そうけい)に結び、袖口の広い上衣を左前に着て、長いスカート(長裙(ちょうくん))をはいて、腰には帯を巻いています。朱などの彩色が一部残っています。型づくりを基本とした成形で、素焼きした後、全体に白化粧を施し下地とした上に彩色が施されていたと考えられます。当時、墓には被葬者である主人のためにこうした日常生活の作業をする様々な侍者を表した俑の一群が副葬されていました。	
3	加彩楽女俑(かさいがくじょよう) FIGURE OF A FEMALE MUSICIAN Earthenware with painted decoration	北魏時代・6世紀 Northern Wei dynasty, 6th century	h: 10.6 w: 6.6×8.0	04104	海野信義氏寄贈 Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi	こちらNo.1、2と同じ北魏洛陽遷都後の俑で、一括品と考えられます。両手を胸前に挙げ坐す双髻(そうけい)の女性です。袖口の広い上衣をに長いスカート(長裙(ちょうくん))をはいています。全体に白化粧を施してから、彩色を加えていたようで、彩色はほとんど剥落しています。洛陽地区の北魏墓出土の類例から、本来は楽器を持って演奏をしていた楽人であったと考えられます。当時の墓にはこうした楽人俑がセットで副葬される場合があり、墓の中をにぎやかに演出しています。どんな音楽を奏でていたのでしょうか。ややうつむき加減で穏和な笑みをたたえています。	

特集展「中国陶俑の魅力」(2017年12月16日～2018年3月25日)

4	<p>三彩侍女俑(さんさいじじょう)</p> <p>FIGURE OF A FEMALE ATTENDANT</p> <p>Earthenware with three-color glaze</p>	<p>唐時代・8世紀</p> <p>Tang dynasty, 8th century</p>	<p>h: 26.3</p> <p>w: 6.3×5.4</p>	<p>04108</p>	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi</p>	<p>唐三彩は褐釉や緑釉、白釉(透明釉)など複数の低火度鉛釉が掛け合わされた器物や俑に対する総称です。色釉の組み合わせや白斑などを効果的に用いられた華やかさが特徴です。唐三彩は女帝・則天武後の治世(690-705)に都洛陽を中心に全国的に流行し、鞏義(きょうぎ)窯はその代表的な生産地でした。長いショール(披帛(ひはく))をかけたこのタイプの侍女俑は8世紀初頭の洛陽地区でしばしば出土しています。カオリン質の白い胎土などから、この俑も鞏義窯の製品と考えられます。顔には三彩釉が施されていないのは、繊細な表情の描写にはやはり加彩が適していたからでしょう。</p>	
5	<p>三彩胡人俑(さんさいこじんよう)</p> <p>FIGURE OF A HU MAN</p> <p>Earthenware with three-color glaze</p>	<p>唐時代・7世紀</p> <p>Tang dynasty, 7th century</p>	<p>h: 30.8</p> <p>w: 8.7×6.9</p>	<p>04114</p>	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi</p>	<p>胡人とは中国の北方や西方の異民族の人々を指す総称です。唐時代の胡人俑には、当時シルクロードを通じて活発な商業活動に従事した中央アジアのイラン系のソグド人が多く見られます。この胡人俑も彫りの深い顔で、鼻が高く、あごひげや口ひげをたくわえた特徴からソグド人かもしれません。右手を胸前で握り、左手は腰のベルトをつかんでいるようで、馬や駱駝の馭者(ぎよしゃ)かもしれません。都長安や洛陽をはじめ唐の領域に定住した胡人も多くいたようで、異国情緒あふれる胡人の文化は唐でも流行しました。</p>	
6	<p>三彩鎮墓獸(さんさいちんぼじゅう)</p> <p>FIGURE OF A TOMB GUARDIAN BEAST</p> <p>Earthenware with three-color glaze</p>	<p>唐時代・7世紀</p> <p>Tang dynasty, 7th century</p>	<p>h: 31.2</p> <p>w: 11.4×9.7</p>	<p>04115</p>	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi</p>	<p>鎮墓獸(ちんぼじゅう)とは墓室の入口付近に置かれ墓を守護する役割をもった一種の神獣です。5世紀頃から鎮墓獸は人面獸身形のものと獣面獸身形のものが一對で墓に置かれるようになります。これは人面獸身形のもので、いかめしいその顔つきや大きな耳、長い角は墓のいかにも番人にふさわしい迫力をそなえています。唐時代の鎮墓獸はこのようにほとんどが岩座上に蹲踞(そんきょ)の形で坐っています。両肩には翼が生え、足は馬のような蹄(ひづめ)を持っています。大きな耳の表現など洛陽地区の出土例に多いことから、洛陽地区でつくられたものと考えられます。</p>	




特集展「中国陶俑の魅力」(2017年12月16日～2018年3月25日)

7	<p>加彩 騎馬女俑(かさい きばじょよう)</p> <p>FIGURE OF A LADY RIDING A HORSE</p> <p>Earthenware with painted decoration</p>	<p>唐時代・8世紀</p> <p>Tang dynasty, 8th century</p>	<p>h:37.0</p> <p>w:30.4×16.6</p>	<p>00624</p> <p>住友グループ寄贈(安宅コレクション)</p> <p>Gift of SUMITOMO Group (The ATAKA Collection)</p>	<p>唐時代、都長安(現在の西安市)の繁栄は隆盛を極め、世界各地から人やモノが集まる一大国際都市でした。そのため西アジアをはじめとしたいわゆる「胡風」の影響などから、盛唐期には女性が胡服を着たり、男装をしたり、騎馬することが流行しました。本作は騎馬女俑の優品の一つです。西安で発見された開元12年(724)の金郷県主(きんごうけんしゅ)墓出土の作例と類似しており、本作もほぼ同時期のものと考えられます。「開元の治」と呼ばれた玄宗(げんそう)皇帝の繁栄した治世のものです。岩崎家旧蔵品で、静嘉堂文庫美術館所蔵の騎馬婦人俑3点と本来一括で出土したものと推測されます。</p>	
8	<p>加彩 騎馬鷹匠俑 かさい きばたかじょうよう</p> <p>FIGURE OF A FALCONER RIDING A HORSE</p> <p>Earthenware with painted and gilt decoration</p>	<p>唐時代・8世紀</p> <p>Tang dynasty, 8th century</p>	<p>h:37.0</p> <p>w:31.0×15.8</p>	<p>00625</p> <p>住友グループ寄贈(安宅コレクション)</p> <p>Gift of SUMITOMO Group (The ATAKA Collection)</p>	<p>No.7の騎馬女俑と同一の作風で、一括品の可能性が高いものです。鷹冠をかぶり、右手には鷹がとまった鷹匠です。への字に結んだ口に緊張感がうかがえます。ふっくらした顔立ちは先の騎馬女俑に通じるものがあり、盛唐開元年間(713-741年)の成熟した人物造形をうかがわせます。服装の一部に貼金(金彩)の痕跡が見られ、本来華やかな彩色が施されていたことが分かります。岩崎家旧蔵品です。</p>	
9	<p>三彩駱駝(さんさいらくだ)</p> <p>FIGURE OF A CAMEL</p> <p>Earthenware with three-color glaze</p>	<p>唐時代・8世紀</p> <p>Tang dynasty, 8th century</p>	<p>h: 56.0</p> <p>w: 40.3×13.4</p>	<p>04116</p> <p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. Umino Nobuyoshi</p>	<p>首をもたげ嘶(いなな)くフタコブラクダの一瞬を捉えた見事な造形を見せています。「砂漠の船」ともいわれる駱駝は、シルクロードの交易には運搬手段をはじめ必要不可欠なものでした。三彩の駱駝には荷物を運んだり、背に楽隊を載せたりしたものもあり、サイズも高さ90cm近い大型のものも知られています。また、駱駝とともに駱駝を牽(ひ)く、胡人俑もセットとなる場合が多く、墓の中にはあたかも当時の生活の一場面が再現されているかのようなようです。駱駝を含めた動物模型の明器も基本的には型でつくられており、西安市内で発見された窯址からはパーツごとの型も見つかっています。</p>	

特集展「中国陶俑の魅力」(2017年12月16日～2018年3月25日)

10	<p>三彩天王俑(さんさいてんのうよう)</p> <p>FIGURE OF A HEAVENLY KING</p> <p>Earthenware with three-color glaze</p>	<p>唐時代・8世紀</p> <p>Tang dynasty, 8th century</p>	<p>h: 89.2</p> <p>w: 35.5×13.6</p>	<p>04118</p>	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. Umino Nobuyoshi</p>	<p>朱雀冠(すざくかん)をかぶり、甲冑(かっちゅう)を身にまとい、左手を腰に当て右手は上に挙げ槍を持つようなその姿は、仏教の四天王(とくに増長天)や十二神将を彷彿(ほうふつ)とさせます。そのため、こうした武人俑は「天王俑」あるいは「神将俑」と呼ばれています。天王俑は7世紀後半に登場し、墓室の入口付近に鎮墓獸などとともに入れられました。口髭(くちひげ)をたくわえたいかめしい表情と豪華な甲冑は、邪鬼や外敵から墓を守るのにふさわしい威厳をそなえています。岩座上に立ち、牛を踏みつけています。河南省偃師(えんし)市の張思忠(ちょうしちゅう)墓(703年)からほぼ同サイズの類例が出土しており、本作も洛陽地区でつくられたものと考えられます。</p>	
11	<p>加彩天王俑(かさいてんのうよう)</p> <p>FIGURE OF A HEAVENLY KING</p> <p>Earthenware with painted decoration</p>	<p>唐時代・8世紀</p> <p>Tang dynasty, 8th century</p>	<p>h: 67.5</p> <p>w: 26.1×13.4</p>	<p>04117</p>	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. Umino Nobuyoshi</p>	<p>No.10と同じ天王俑ですが、年代はやや下る天宝年間(742-756年)頃の加彩の作例です。隆盛を見た三彩俑も則天武后治世(690-705)の終焉(しゅうえん)とともに開元(713-741)年間の後半にはほとんど見られなくなります。天宝年間以降の天王俑は顔が大きくふくよかで、体つきも柔らかくより躍動感あふれる造形を見せています。高さ1.5m近くのものも知られています。天王俑の足元には仰向けに手足を挙げて踏みつけられている邪鬼が岩座上看られ、岩座正面には空気抜き用の穴がつけられています。こうした天王俑はパーツごとの型を用いて成形されていたことが、西安市内の窯の出土例からうかがえます。墓を守る「鎮墓」の役割を担うにふさわしい威厳と風格をそなえています。</p>	
12	<p>緑釉加彩楽女俑(りょくゆうかさいがくじょよう)</p> <p>FIGURE OF A FEMALE MUSICIAN</p> <p>Earthenware with green glaze and painted decoration</p>	<p>隋時代・6～7世紀</p> <p>Sui dynasty, 6-7th century</p>	<p>h: 24.6</p> <p>w: 7.8×6.0</p>	<p>04105</p>	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi</p>	<p>西アジアあるいはインド起源といわれる琵琶(びわ)を弾く女性の楽人俑です。左手側の海老尾(えびお)と呼ばれる部分を下向きにして演奏する方法は現在とは逆になります。細身の体型でハイウエストのスカート(長裙(ちょうくん))をはいたこうした女性のスタイルは、隋から初唐にかけて流行しました。全体に白化粧を施してから、スカート部分には低火度鉛釉の緑釉が施されており、ドレープ(襷(ひだ))の美しさを際立たせています。細く繊細な眉や目の描写や頬・唇の朱彩は、俑全体に独特の生気を与えています。赤みを帯びた胎土は都長安(現在の西安)一帯によく見られるもので、本作も西安地区でつくられたものと推測できます。</p>	

特集展「中国陶俑の魅力」(2017年12月16日～2018年3月25日)

13	<p>黄釉加彩侍女俑(おうゆうかさいじょよう)</p> <p>FIGURE OF A FEMALE ATTENDANT</p> <p>Porcelaneous ware with painted decoration on yellow glaze</p>	<p>唐時代・7世紀</p> <p>Tang dynasty, 7th century</p>	<p>h: 21.2</p> <p>w: 5.7×6.2</p>	04111	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi</p>	<p>白いカオリン質の胎土に低火度鉛釉の淡い黄釉を掛け、その上に彩色を施した黄釉加彩俑は、唐三彩出現以前の初唐期、とくに7世紀の40-60年代に見られます。公主をはじめ高い身分の墓にも見られることから、特別につくられた付加価値の高いものであったと考えられます。産地は不明ですが、洛陽地区の出土例も多いため、鞏義窯が有力な候補といえます。淡い黄白色の釉色が独特の質感を見せ、頭髪や眉、目などに黒、帯に朱の彩色が施されています。黄釉と加彩の組み合わせによる黄釉加彩俑は、複数の釉の組み合わせによる唐三彩俑が出現する以前の一時期に花開いた技法でした。</p>	
14	<p>黄釉加彩騎馬女俑(おうゆうかさいきばじょよう)</p> <p>FIGURE OF A LADY RIDING A HORSE</p> <p>Porcelaneous ware with painted decoration on yellow glaze</p>	<p>唐時代・7世紀</p> <p>Tang dynasty, 7th century</p>	<p>h: 36.4</p> <p>w: 28.8×10.8</p>	04112	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi</p>	<p>これも黄釉の上に加彩が施された初唐期特有の俑です。帷帽(いぼう)と呼ばれる笠に似た帽子をかぶった騎馬姿の女性俑です。左手は手綱を握り締める格好をしています。唐時代、女性の間でも乗馬が流行しました。頭から首にかけては布をまきつけており、帷帽とともに、風砂を避けるためのものでした。すっきりとした目鼻立ち、そして背筋をピンと伸ばし、颯爽(さっそう)と馬を駆(か)る姿が凛々(りり)しく、黄釉加彩俑の優品の一つといえます。類例が陝西省礼泉(れいせん)県の昭陵(しょうりょう)に陪葬される張士貴(ちょうしき)墓(657年)と鄭仁泰(ていじんたい)墓(664年)という二人の大將軍の墓から出土しています。こうした騎馬女俑は貴人の外出(出行(しゅっこう))にお供をする侍女であったと考えられます。</p>	
15	<p>黄釉加彩卷髪俑(おうゆうかさいけんぱつよう)</p> <p>FIGURE OF A MAN WITH CURLY HAIR</p> <p>Porcelaneous ware with painted decoration on yellow glaze</p>	<p>唐時代・7世紀</p> <p>Tang dynasty, 7th century</p>	<p>h: 29.0</p> <p>w: 9.9×9.5</p>	04110	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi</p>	<p>卷髪(けんぱつ)で眉が太く目が大きい顔から、「崑崙人」(東南アジア人)であるといわれています。唐の都長安には東西の人やモノがいきかう、世界有数の国際都市でした。当時の俑にもソグド人やアラビア人など西方からのいわゆる胡人やアフリカや東南アジアなどの黒人などを表したのが見られます。赤と白のストライプの半ズボンをはき、肩には斜めに帯をつけ、裸足で足は太く、当時貴族の邸宅などにいた外国から売られてきた奴隷でしょうか。右手を高く上げた姿は、何か曲芸をしているともいわれていますが定かではありません。陝西省礼泉(れいせん)県の鄭仁泰(ていじんたい)墓(664年)などから類例が出土しています。異国情緒と躍動感あふれる造形は唐の国際性を見事に反映しています。</p>	

特集展「中国陶俑の魅力」(2017年12月16日～2018年3月25日)

16	<p>加彩侍女俑(かさいじじょよう)</p> <p>FIGURE OF A FEMALE ATTENDANT</p> <p>Earthenware with painted decoration</p>	<p>唐時代・8世紀</p> <p>Tang dynasty, 8th century</p>	<p>h: 33.6</p> <p>w: 9.8×7.7</p>	04106	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. Umino Nobuyoshi</p>	<p>唐時代には様々な趣向をこらした髪型が流行しました。左右の鬢髪(びんぱつ)をやや前に張り出し、頭上に双髻(そうけい)を結っています。切れ長の目と小さくしまった口元、そしてふっくらとした頬が印象的で、盛唐期の女性の美しさをよく表しています。男性の服装を着ている、いわゆる「男装の麗人」で、袖の中の両手は胸前で組む拱手(きょうしゅ)をしています。唐時代、婦人たちの間では男装や騎馬が流行しました。こうした俑は基本的には型でつくられ、頭と体は別々につくられてから接合されています。全体に白化粧が施された上に、本来は華やかな彩色が見られましたがほとんど剥落してしまっています。</p>	
17	<p>加彩侍女俑(かさいじじょよう)</p> <p>FIGURE OF A FEMALE ATTENDANT</p> <p>Earthenware with painted decoration</p>	<p>唐時代・8世紀</p> <p>Tang dynasty, 8th century</p>	<p>h: 45.2</p> <p>w: 12.4×12.2</p>	04107	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi</p>	<p>比較的大型の女俑です。盛唐以降、俑や明器の副葬の数量や大きさについて身分により細かな規定が何度か設けられましたが、実際の出土状況を見るとあまり守られていなかったことが分かります。顔を上げ、左手を胸前で袖の中にしまい、右手を前に出すしぐさには優雅さが感じられます。小鳥を手に持つ類例も知られています。両頬やショール(披帛(ひはく))の部分には彩色も残っており、一部に花柄模様も確認できます。彩色の状態のせいか、表情にはやや物悲しさも感じられます。ゆったりとした長いスカート(長裙(ちょうくん))からは先端の反り返った靴がのぞいており、これも当時の女性たちの流行のファッション・アイテムの一つでした。</p>	
18	<p>加彩牛車(かさいぎゅうしゃ)</p> <p>FIGURE OF AN OX-DRAWN CARRIAGE</p> <p>Earthenware with painted decoration</p>	<p>唐時代・8世紀</p> <p>Tang dynasty, 8th century</p>	<p>h: 28.1</p> <p>w: 46.0×22.2</p>	04113	<p>海野信義氏寄贈</p> <p>Gift of Mr. UMINO Nobuyoshi</p>	<p>牛車の模型明器です。アーチ型で湾曲した車蓋(ほろ)のついた長方形の車輿(しゃよ)の二輪車を、二本の木製の轆(ながえ)(後補)で牛が牽(ひ)いています。牛の生き生きとした造形のみならず、車輿部分も精巧に表現されており、当時の牛車の実態をうかがうことができます。牛車は貴人の外出(出行)時の乗り物として古くから使われていました。そのため、墓に副葬される明器でも必需品の一つであり、唐時代には緑釉や三彩のほか、青銅製のものも見られます。6世紀頃の墓の壁画には男性の被葬者が馬に乗り、その妻が牛車に乗り出行する場面が描かれた例もあることから、これも女性の乗り物であったと思われます。</p>	